

2025年1月12日 降誕節 第3主日礼拝メッセージ

「まじ BIG LOVE」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 3章16-17節

最近、高3の娘がご飯を食べている時、外を歩いている時など、時も場所もかまわず、いろんなポーズで自撮りをしているので、「何やってんの?」と尋ねたところ、「BeReal(ビーリアル)」なんだそうです。これは最近の「Z世代」、10代から20代の若者を指す言葉らしいのですが、そのZ世代に流行しているアプリ(スマートフォン用のソフトというか、プログラム)なんだそうです。Berealの詳しい説明は省きますが、とにかく素朴に「Z世代恐るべし」と思いました。私が高校3年生の頃なんて、コンピュータなんて触ったこともなかったですし、作文やレポートは手書き、携帯電話もなかったので、家の電話でおちおちガールフレンドと電話もできませんでした。まあそれもそれなりに楽しい思い出でしたけど、生まれたときからパソコンや携帯がある環境で育った「デジタルネイティブ」の世代も、いろいろと楽しそうだなあとうらやましく思いました。

さて、20歳前の私の子どもたちは「Z世代」といい、その親である1965~80年くらいに生まれた我々などは「X世代」と呼ばれるそうです。そしてその中間、1980年から95年くらいに生まれた層が「Y世代」となると、生まれた年代に多少の誤差はあるものの、だいたいそのような区分になっているようです。そんな区分知りませんでしたけど。今日は、その中の「Y世代」、ちょうど20年くらい前の若者たちについて、少しお話ししたいと思います。

今から20年前くらい、東京の渋谷を中心として、「マンバ」と呼ばれる若い女性たちがおりました。実は大阪にもいたらしいです。その元をたどると、1998年、突然のように渋谷に登場して話題になった「ガングロ」という種類の人たちにさかのぼるわけです。ガングロというのは、髪の毛が茶髪あるいは白髪で、原色の衣服にミニスカート姿、厚底ブーツまたはサンダルを履き、日焼けサロンで焼き上げた顔の黒さが異様に目立つことから、顔黒(ガングロ)と命名された女子高校生たちです。ガングロが大流行した当時は、渋谷駅前の通行人の半分がガングロであったといっても過言ではなかったそうです。そんなガングロたちの外見や言動は、あたかも彼女らの自己主張・自信の表れであったかのように、彼女たちはどちら

かという周囲に対して敵対的であり、社会に対する反抗的な性格が取り上げられることが多かったようです。

そんなガングロギャルがさらに過激になったものに「ゴングロ」とか「ヤマンバ」などがありました。ゴングロとは、ガングロよりもさらに顔を黒くしたもので、ヤマンバとは、その名前で想像できるような、爆発したような白髪と黒い顔、そしてなぜか目元と唇の周りを白く隈取りしたような特徴的なファッションです。まあとにかく目立つファッションだったわけです。ある調査によりますと、ヤマンバはその後、2000年夏頃にさらに過激な「アマゾネス」へと発展を遂げたいらしいのですが、しかしそのガングロ以上の攻撃性が受け入れられずに、一気に衰退へと向かったのだそうです。

しかし、そうやって絶滅したかに見えたガングロたちは数年後、進化形であるヤマンバのさらなる進化形としての「マンバ」となって復活しました。JMR 生活総合研究所 (Japan Consumer Marketing Research Institute) というところに「消費社会研究チーム」というものがあって、マンバについてある提言論文を発表していました。題して「かわいいマンバ」。これは、マンバと先ほどのガングロとの共通点や相違点、またそれぞれの特徴、それぞれが出現した社会的な背景など、詳しく分析しており、大変興味深いものでありました。マンバもガングロも、いずれも顔が黒く、街で座って群れ、クラブで遊び、周囲から見ると異様であるにもかかわらず彼女らは目立つことを楽しんでいるなどの共通点があるものの、その2種の間には価値観の方向性に差異が見られるのだといいます。

そしてそれは、彼らそれぞれが活動した社会背景によっており、つまりガングロが活動していた1999年頃は、リストラが当たり前のようになされ、実力主義・「勝ち組負け組」といった価値観がもてはやされるようになり始めた頃であり、ガングロたちは自らを強い者、実力ある者とし、リストラに怯える情けない社会への反発を体現していたのだと論文は言います。ガングロのやや攻撃的な性格は、ここからきているとみることができるといいます。それに対してマンバの登場したのは、ごく一部の限られた人間しか「勝ち組」にはなれないのだということがわかってきたが、それでもまだ競争を強要され続ける、そのような時代で、マンバたちは、そんな実力主義・競争重視の社会に対して抵抗があるのだけれども、ガングロのように攻撃的にならなかった。奇抜な服装や髪型は好むものの、一般的な価値観と同様にかわいい物を好み、周囲や仲間との協調・平和による「小さな幸せ」によって、そんな

現代社会を否定しようとしていたのだということでした。そしてそのように、マンバたちは競争のみを重視することによって社会が失おうとしている「協調主義」や「平和主義」をいま呼び戻そうとしているのだとして、論文は閉じられています。

長くなりましたが、本日の聖書は、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けるところです。イエスが洗礼を受けて水の中から上がられると、天が割れて、神の霊が鳩のように降ってくるのを見たとあります。それと同時に「これは私の愛する子、私の心に適う者」という声が天から聞こえた。これは神様が洗礼を受けたイエス様に対して宣言された言葉であるわけですが、私自身はこの言葉は、私たちみんながそれぞれ神様から語りかけられている言葉であるように思うわけです。もしかすると洗礼を受けられる時に感じた方もおられるかもしれません。あるいは、日常のふとした瞬間に神様からのこのメッセージを感じたことがある方もおられるかもしれません。もしかすると、特に洗礼を受けていなくても、神様は私たちにこのように語りかけて下さっていて、私たちがそれに気づいていないだけなのかもしれません。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者（マルコ・ルカにおいては「これは」の部分が「あなたは」となっていますが）」という言葉の中の「私の心に適う者」という部分、これはもちろん、「神様の御心に適う人物である」という意味なのでしょうが、しかしこの「私の心に適う者」という部分、ギリシャ語からの直訳では「わたしはこれを喜ぶ」とも訳すことができます。つまり「あなたは私の愛する子である。私はこれを喜んでいる、あなたのことを喜んでいる」というように聞くことのできる言葉なのです。

神様は私たちがどんな者であっても、生まれた時から天に帰っていく時まで、いつも私たちのことを見つめ、私たちの歩みを支え導いて下さっています。私たちがどのような歩みをするにせよ、仮に神様の悲しむような歩みをなしてしまっている、神様の御心に適っていないとしても、神様はもともとは、私たちの存在、私たちの命を喜んで下さっているはずなのです。それは、それこそ私たちの息子や娘がどんなにろくでもないボンクラだったとしても、生まれた時は「よかったね」と無条件で喜ぶことができた、親である私たちの心情そのものだと思うわけです。神様はやっぱりそういう親である私たちと同じように私たちのことを見てくださっているはずなんです。

昔、先ほどお話したマンバと呼ばれる若い女性がテレビの対談に出ていたことを思い出します。彼女は「今が楽しければいい」という話をしており、「また言うてる

わ」と思わず眉をひそめてしまいました。よく聞いてみると彼女自身、大きな病気を小さい頃に患い、また中学でイジメにあたりした経験があって、そこから出た言葉であったことを知りました。彼女のその言葉は、今が楽しければいい、と言うだけではなく、今を精一杯大事に生きる、という意味でもあったように思います。彼女は今イジメにあって苦しい思いをしている同世代の子らに対して、「一度マンバやってみなっ」とメッセージを送っていました。マンバの格好で町を歩けば、きっと強くなれるよ、というわけです。マンバになることは、自分の殻を破り、命を楽しむ一つの方法なのだといっているようでした。正直、マンバを少し見直しました。しかし、そんな彼女も、周りから自分のことを虫けらみたいに見られるのがとても悔しいといっていました。私たちだってそんな悔しさを感じたことがあるのではないのでしょうか。人から勝手に不本意な評価を下されて悔しい思いをしたことがあるのではないのでしょうか。

旧約聖書のサムエル記上 16 章には、預言者サムエルが神様の導きによってベツレヘムのエッサイという人物を訪ね、彼の 8 人の息子たちの中からイスラエルの王となるべき人物を探す場面があります。その際に神様はサムエルに言われます。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」その結果、一番末っ子のダビデが選ばれるわけですが、この神様からの言葉を、私たちも忘れないようにしたいと思います。神様は人間が見るようには見ない。神様は私たちのことを心で見て下さる。私たちは、人からの評価、世間的な評価はどうあれ、神様に「あなたは私の愛する子、私はあなたのことを喜んでいる」と言ってもらっているのです。

うちの娘も最近の Z 世代、ギャルの端くれですから、私も最近、ギャルたちについていけるようにちょっと検索したりするわけです。その中で、若い女性たちが読むような雑誌による「ギャル語流行語大賞」という特集などもあるようで、そういうのもふむふむって見たりするんですけど、その「ギャル語」の中で「BIG LOVE (びっぐらぶ)」という言葉があることを知りました。ギャルたちが言うところの「大好き」「愛してる」「ありがとう」などを意味する言葉なんだそうです。それを応用させてもらいますと、「ほんま BIG LOVE やで」「まじ BIG LOVE すぎるんだけど!」そういうメッセージを、神様は私たちに送ってくださっている。私たちは神さまからのそういうメッセージを心に留めていきたい、今年も心に留めながら歩いていきたい、と思います。